

第3章

万人のための教育

普遍的初等教育は、2010年までに多くの国々でほぼ現実的なものとなっていたが、一方でそうではない国もまだ数多く残されている。ほかの国家的な目標では目覚ましい成果を上げていた国であっても、必ずしもすべての人々が一様に初等教育を受けられる環境にあるわけではない。初等教育を受けていない6,700万人の子どもたちのうち、およそ43%はサハラ以南のアフリカに住んでおり、さらに27%は南・西アジアに住んでいる。ここにはジェンダークラスが深くかかわっている。データが入手できる171カ国のうち、初等、中等学校ともに女子と男子の児童数が等しいと言える国は、わずか53カ国にすぎない。

サハラ以南のアフリカは、初等学校への就学率の上昇

では世界で最も早いペースで進んでいるが、女子の中等学校への就学率は低下してきている。就学前教育にアクセスできる比率については、世界全体でも44%と低水準にあるが、この地域では更に低く19%しかない。こうしたアフリカの現状は、すべての子どもたちが教育を受ける権利を実現するには、どれだけのことを達成し、そのためにまだどれだけの行動が必要で、そしてどれだけの留意が必要であるのかを示している。

ユニセフはこの権利を、単に学校に行くことができるというだけでなく、それ以上のことを包括的に含むものと定義している。しかし、まずは学校にアクセスできることが言うまでもなく第一歩である。そのうえで、子どもたちが継続的に学校に通うことができる環境も整備されていなければならない。さらに、生活の基礎を築くことになる質の高い教育が提供されなければならないのである。

2010年もユニセフは引き続き、教育の質を向上させ、学校に通い、卒業する子どもの数の増加を目指す各国の取り組みを支援した。また、教育を受けるという選択肢を阻害するような不公平さを取り除く、重点的取り組みもさらに強化した。格差というのは、「貧困家庭の子どもは学校ではなく仕事に行かなければならない」、「遠隔地にある学校は、チョーク、教科書、椅子などの基本的なものをまかなえない」などといった、さまざまな形で存在する。

教育というのは、人間のエンパワーメントを速め社会を変えていく力を持つものであるため、教育の機会を欠くことは、その一つひとつがすべて子どもにとっての損失となる。教育が受けられなければ、



洪水で被害を受けたが修復された学校で授業を受けている少女たち (パキスタン)

© UNICEF/NYHQ2010-2742/Ramonedda

最も取り残されている子どもたちは、機会やものを生み出す能力も減らしていき、ますます後れを取るばかりである。そしてこのことは、経済や社会にも重くのしかかることになる。

教育の質の重視

質の高い基礎教育は、子どもを活発にし、成長と幸福を積極的に追求させる。教育の質には、適切な教材、よく練られたカリキュラム、安全で清潔な学校施設、子どもたちを有害なものから守るためのメカニズムなどが含まれる。ユニセフは、最もニーズの高い個々の国やコミュニティにおいて、これらのすべてに関して積極的に支援活動を行っている。

質の高い教育は、卒業まで学校に通い続けようという子どもたちの意欲を促すことから、普遍的初等教育の完全普及というMDGの達成へも寄与する。インドネシアでは、ユニセフの支援により、7,500人の教育従事者が学校づくりや学習指導における新たなスキルを取得したところ、途中で脱落する生徒が減り、初等学校から中等学校へ進級する子どもたちが増えた。ラテンアメリカとカリブ海諸国の一部でも、より多くの子どもたちを初等教育から中等教育へ進級させることが主要な問題になっている。アルゼンチンの4つの州では、ユニセフの支援を受けて、1,300人の教員への研修と、約1万400人の生徒への中等教育進級を支援する特別プログラムが策定された。

質の高い教育を促進するためにユニセフが全世界で適用している戦略は、単に子どもたちを教育するだけでなく、子どもたちの健康、良好な栄養状態、安全な水、改善された衛生施設（トイレ）、衛生教育へのアクセスを確保することも目指す、子どもに優しい学校の構築である。こうした総合的サービスは、取り残された子どもたちが自分たちの被っている不利な状況を埋めていくために特に重要となり得る。

現在マラウイでは、初等学校の児童たちの約15%がユニセフの支援を受けた子どもに優しい学校に通っているが、そこは適切な学校施設、最新の教材、および十分な訓練を受けた指導者に重点を置いている学校である。インドでは2010年に、「無償義務教育を受ける子どもの権利法」という画期的な法律が制定された。この法律は、すべての子どもたちのための無償の義務教育を提供し、初等教育の修了に妨げとなる障害を取り除くことを保証している。ユニセフは、その実行に向けた初期の取り組みにおいて各州

政府と協力し、給食制度などをはじめ、47万校における子どもに優しい対策の策定を支援した。

東ティモールでは、ユニセフは「Eskola Foun（子どもに優しい学校）」プログラムを通じて、39の学校で、教員のための実践的で子どもを中心に据えた研修を取り入れている。研修は職務の中で行われる。教員は新しいスキルを学んで即座にそれを実践に移し応用し、一方でメンタリング（指導）を通じて継続的にサポートを受け、モニタリングを通じてより良く進めていく。2010年には、460人の教員がプログラムに参加して、1万3,200人近くの生徒を教えた。子どもたちは、より分析的で創造的なスキルを用いていると報告され、また教員は、自分の教え子たちの支援により深くかかわるようになってきている。

ユニセフは、すべての地域の国々において、教育の質と包括性を向上させるために必要な国家的枠組みの確立を支援している

イエメンにある「子どもに優しい学校」は、女子の入学率を男子100人に対してわずか73人という全国平均を上回る88人にまで押し上げるのに貢献した。この成功をもたらした1つの要因は、農村部の学校に1,000人の女性教員を配属したことである。女性教員がいると、親はより安心して娘を学校に送り出すことができるとの認識に基づき、ユニセフはその中の3分の1を超える教員の研修を支援している。また、特別訓練を行うことによって教員がジェンダーに対してより敏感になるとともに、清潔で安全な衛生施設（トイレ）を、男子と女子のどちらの児童も同等に利用できるようになっている。

質の高い教育は、子どもたちを守る。なぜなら安心感を抱いている子どもたちは、より自由に学ぶことができるからである。2010年に、セルビアはユニセフの支援を受けて、校内の暴力防止を法的に主流化する取り組みを成功させた。政府は、暴力事件をモニタリングして予防する体制を構築、推進しているところである。セルビアの初等学校の5分の1近くは、すでに「暴力のない学校」になるための手続きを終えているところである。

また質の高い教育は、子どもたちに、生涯を通して自分自身を守る力と十分な情報を得た上での意思決定を行う能力も与える。ユニセフは、モザンビークにおいて、子どもたちへのHIV感染予防に重点を置いたライフスキル訓練

を130万人に実施し、またニカラグアでは、性に関する国の指針の実現をサポートした。レバノンにいるパレスチナ難民の子どもたちに対するライフスキル訓練では、薬物乱用、自分の意見を述べること、リーダーシップ、暴力への対処法について探求している。

質の高い教育は、幼児の能力開発支援から始めるべきであるということを裏付ける証拠や経験が次第に増えてきている。特に生まれつき不利な立場に置かれている子どもたちの場合、就学前教育やその他の幼児向けの能力開発サービスを行うことで、その後への準備ができる。つまり子どもたちは学ぶ準備ができた状態で学校に入学することになり、最後まで学校に通い続ける可能性が高いのである。特化した専門プログラムは、刺激的、養育的、かつ安全な環境の中で初等学校への準備態勢を育むとともに、衛生と栄養状態を増進するための総合的サービスを提供することもできる。

6カ国で行われているユニセフの「入学準備」プログ

ラムの2010年のレビューでは、子どもたちの学習に対する準備態勢の目覚ましい向上と、読み書きと算数の学習開始時において相応の効果が見られた。2年前は45カ国であったのだが、2010年には65カ国が全国的な入学準備態勢を政策として実現させた。

ユニセフの支援を受けて、東カリブ地域の10の国と地域は、幼児の能力開発に関する政策、基準、計画を制定している。その実施に向けて、2010年にユニセフは、トリニダードトバゴのパートナーを支援して、危機に弱いコミュニティ向けの子育てスキル・ワークショップを開発した。子ども健康手帳 (child health passport) は、親が自分の子どもの全体的な発育を観察するのに役立っている。アンティグアバーブーダ、セントビンセント・グレナディーン、およびタークスカイコス諸島では、早期の学習を促進するためのキャンペーンが考案された。

最近の国際的な評価では、多くの国々が幼児の能力開発に投資していることが示されている。しかし、資金調達、

熱帯雨林の奥深くで生徒が教師になる

ライベン は、スリナムの密集した熱帯雨林の奥深くにあるアララパロエ村の出身である。同村には、電気も水も学校もない。16歳のライベンは、5歳のときに学校に行くことができたが、そのためには船と飛行機を使って数日間かけてパラマリボまで出て行かなければならなかった。しかしライベンが11歳のとき、父親がそれ以上学費を捻出できなくなってしまった。それが、少なくとも一時的にライベンの教育の終わりとなった。彼は5年生を修了して家に戻った。

しかしそれから2年後、ライベンはアララパロエ村で初等学校の教員になるよう依頼された。彼は悲しそうな笑みを浮かべてこう述べている。「私は子どもたちを見て、彼らが文字を読むことも書くこともできないことを気の毒に思っていました。自分にどれだけのこと

ができるか分かりませんでした。私はなんとしても彼らの力になりたいと思いました。私たちはこれまでに学習してきました。私たちは、自分たちの先生が教えてくれたことの中から思い出せることを教えています。」

たとえ従来通りの研修を受けた教員のようなスキルがなくとも、ライベンには別の大きな優位性がある。それは、彼がアメリカ先住民族の文化を知っており、部族の言語を話すということである。そして彼はすでに自分のコミュニティに住んでいるのだ。そもそも、資格を持った現職教員をアララパロエ村のような隔絶された場所に呼び寄せるなどということは、不可能に近い。スリナムの国内全体で、正規の資格を持つ教員はわずか20%しかないのだ。

子どもたちの教育を受ける権利の妨げとなっている地理条件などの障害を取り除くために、ユニセフは教育省と協力して、ライベンのような人々を訓練するた

めの革新的戦略の策定と実施に取り組んでいる。「子どもに優しい生徒主体の教育」というユニークなコースでは、基礎的スキルを取得している地域コミュニティ出身の教員の育成を行う。

このコースでは、国際的な教育規範を地域文化に適合させて、子どもに優しい教育を実践し、アドボケートする能力を参加者に身に付けさせる。2010年末までに、スリナムのすべての初等学校でこのコースが実施された。同国の内陸部では、教員の95%が第一段階の研修内容を完了し、子どもたちのさまざまな才能を刺激する授業計画の策定に着手していた。

ライベンは、コースの中で質問に正解すると顔を輝かせる。彼は教員であると同時に、自分の12人の教え子たちのために意欲的に学ぶ生徒でもあるのだ。



各方面の協調体制の改善、国力の増進は、プログラムの対象を最も不利な立場の、取り残されている子どもたちにまで拡大するにあたって、課題となっている。

公平性に向けた対策

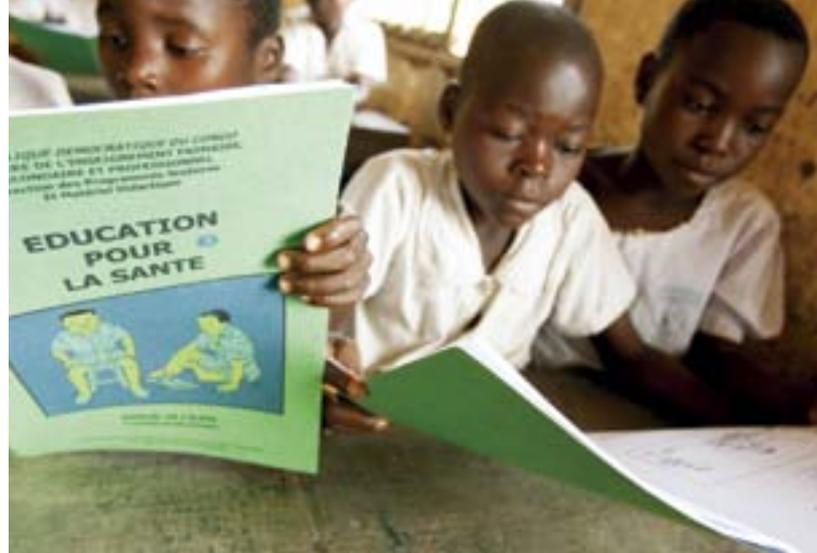
公平性の観点から質の高い教育へのアクセスに注目するには、さまざまなグループの子どもたちが直面しているそれぞれ特定の障害を認識する必要がある。こうした障害は、やがて自然に消滅するものと考えてはならず、それらに対して意図的に取り組まなければならない。そのためには、社会的保護計画の中での教育に対する特別規定の制定や、各グループの置かれている状況に適合したカリキュラムや教員の研修の提供といった、さまざまな行動が必要になる場合がある。

ユニセフは、2010年にユネスコ（UNESCO）と共同で、学校に通っていない子どもたちの問題により体系的に取り組むことを目的として、25カ国を対象にした世界的イニシアティブを開始した。現在では多くの国々が、学費や栄養不良といった教育へのアクセスとその継続を妨げる障害を少なくしていくための対策を広めている。

全世界において、男子と比べて圧倒的に多い割合の女子が、単にその性別のために教育を受ける権利を否定されている。2010年に、「国連女子教育イニシアティブ」の10周年を記念して、国際的なパートナー、子どもの権利活動家、政策立案者、学者がダカールに集まり、女子をエンパワーする質の高い学校教育カリキュラムの確立に向けてさらなる取り組みを行うことで合意した。

チャドでは、ユニセフの対象を絞った取り組みが功を奏して、女子の就学率が低い4つの県で、5万1,000人近くの子どもの授業に参加し、そのうちのほぼ半数は女子となった。マダガスカルでは、政府がユニセフの専門知識を活用して、「教育から排除された子どもたちの地図の作成（exclusion mapping）」を通じてジェンダー格差を確認している。現在の中高等学校活動計画には、「ジェンダー格差を是正する」、「広報キャンペーンを通じて女性のロールモデル（見本となるような人物）を打ち出す」、および「奨学金などのインセンティブを通じて、女子が中等教育レベルまで学習を続けるよう後押しする」という目標が盛り込まれている。

貧困を不公平さのもう一つの主要な指標とすることで、社会的保護計画は、貧困が教育に与える影響を軽減するた



保健教育の授業中に共用の教科書を読む子どもたち。子どもたちは、自分が学んだことを家族にも伝えるように勧められている（コンゴ民主共和国）
© UNICEF/NYHQ2010-1546/Asselin

めの、国の重要な出発点となることが多い。2010年におけるジンバブエでのユニセフの継続的アドボカシーにより、同国政府は、共同出資の中の少なくとも30%を、孤児や弱い立場にある子どもたちの学費を賄う基礎教育支援セットなどの社会的保護プログラムに充てることを了承した。

セネガルの貧しい農村部では、232以上の学校における総合的な保健・栄養サービスにより、それらの地域の3万6,000人を超える生徒たちに支援が届いている。また20の隔絶された学校では、特別な太陽光発電キットによる夜間補習コースのための発電も行われている。これらの地域の子どもたちは、全員が鉄分とビタミンAの栄養補給剤を摂取しており、また国連世界食糧計画（WFP）から補助食料の支給も受けている。現在いくつかの地域では、学校教育を修了する生徒の数が増加している。

ニカラグアでは、安全な水の供給と改善された衛生施設（トイレ）が貧しい先住民地域の学校にまで普及したことで、健康に関する権利が保護され学習環境の改善が進んでいる。2010年にユニセフは、3,000人の子どもたちへ改善された衛生施設（トイレ）の提供と、6,000人の子どもたちへの安全な水の供給を支援した。保健省は、学校の水質調査を改善することに合意し、衛生促進のための「健康な家族・学校・コミュニティ」推進キャンペーンでユニセフと連携した。

ボスニア・ヘルツェゴビナでは、20万人を超える子どもたちが、貧困と排除によって不利な立場に置かれている。そのほとんどは、ロマ民族などの少数民族の出身である。同国では、社会サービスが地域ごとに提供される分権的統治制度に移行したことにより、社会サービスに格差が生じている。ユニセフは、既存サービスを基盤にしつつ、そこへつなげていくメカニズムを強化し訪問支援活動を拡大す

るような、早期幼児開発システムの確立を支援した。現在同国では、新たに設置された5つのサービス・センターが、保健ケア・サービスと早期幼児開発の総合的なサービスの提供を専門的に行っている。

現在では、緊急時とその後の転換期に、国際的にも一国内においても、国連の教育クラスター（支援調整組織）システムへの積極的支援を通じたユニセフの教育プログラムによって、支援の協調性と一貫性が強化されていることが実証されている。また、急速に普及してきた学習プログラムにも拡張性があることが証明されたことにより、規定年齢を超えた子どもたちの再入学や途中で中断した教育課程の修了を可能にしており、格差が続いたり広域に及んだりすることに歯止めをかけている。人道的状況における教育は、身体的にも心理的にも子どもたちを守り、緊急事態後のコミュニティにおいて安定効果をもたらす可能性もある。

イラン国内のアフガン難民に対する2010年の支援において、ユニセフは、安全な通学手段といったインセンティブのあるような特別教室に、女子が出席する機会を拡大した。ソマリアでは、遊牧民の子どもたちには柔軟な授業体制を提供し、貧困層の子どもたちには学費を免除するなどの革新的戦略によって、新たに何千人もの子どもたちが教育を受けられるようになってきている。

ユニセフは、スリランカのかつての紛争地帯において、教育省と州当局と緊密に連携した。そのため、8万人の国内避難民の子どもたちが、現在の避難所から別の福祉センターに移動する際や本来の居住地に戻る際に、ほとんど中断することなく確実に学習を続けることができた。シリアにおける支援は、イラク人難民が密集しているコミュニティが対象となった。学校インフラの改修と学用品の提供により、教育を受けることのできるイラク人の子どもたちが3,700人以上にまで増加した。また補習授業を行ったことで、2,000人を超える生徒たちが学業から脱落するリスクを少なくした。

持続的な前進

質の高い教育制度の基礎となるのは、十分な資源と的確な情報に基づく政策と計画である。低所得の国々は、全体的に中所得国や高所得国よりも国民所得に占める教育への支出割合が低い。しかし予算だけの問題ではない。取り残された子どもたちから教育の機会を奪っている具体的な不公平さを特定し、それに取り組む方法を盛り込んだ包括

的計画を持つような、自国の教育制度を構築する能力のある国は、低所得国の中にはほとんどないのである。

ユニセフは、あらゆる地域の国々において、教育の質と包括性を向上させるために必要な国家的枠組みの確立を支援している。2010年に、コンゴ民主共和国はユニセフの支援を利用して、1年生から3年生までの子どもたちに無償の初等教育を提供するための、新たな政策を打ち出した。学費をなくすことにより、貧困層の子どもたちにとっての大きな障害が取り除かれる。貧困と紛争に苦しめられている国でこれを実現するためには、ほかにもしなければならぬことは数多くあるが、この政策によって必要な行動への道が開かれるのである。

2010年までに、ユニセフが活動を展開している国々の過半数が早期幼児開発政策を採用しており、これにより、依然として世界各地の教育制度に見られる大きな格差の是正が、促進されることになるであろう。バングラデシュは、2013年までにすべての公立学校に幼児クラスを設置して、27万人を超える子どもたちを受け入れるという計画に合意した。

新たな政策や計画によって、これまでなら認識されずに放置されていたかもしれない不公平さに、待望の光が当てられることになるであろう。ユニセフの支援を受けて、ウガンダは2010年に、不利な立場に置かれている子どもたちに対する基礎教育政策をまとめ上げ、またタイは、学校における指導を子どもたちの母語で行う国家言語政策に合意した。カンボジアの包括的教育に向けた新たな国家戦略計画に関しては、不公平の是正の進捗状況を積極的に追跡するための6つの指標作成を、ユニセフは支援した。

世界規模で展開されている「ファスト・トラック・イニシアティブ（万人のための教育）」の下では、低所得国はミレニアム開発目標の達成期限である2015年までの普遍的教育の実現に向けて、特別追加支援を活用することができる。ユニセフは、それらの国による国家計画の策定とその資金調達のための財源の確保を支援することで、その役割を果たしている。2010年には、ユニセフは、ギニアが世界銀行を通じて、390を超える学校を建設するために必要な2,400万ドルを調達できるよう支援した。モルドバは、全国の75%の子どもたちを幼稚園か保育園に入園させるための資金を調達した。ラオスは、ジェンダー格差の大きい行政区域の学校の質を向上させるために、3,000万ドルの資金を調達した。

マイノリティ 二カ国語での指導により少数民族のための教育が向上

ベトナムでは、急速な発展に伴って教育も大幅に進歩している。現在では、ほとんどの子どもたちが初等学校に入学し、通いつけている。これは特に多数民族であるキン族の子どもたちに関して言えることで、その86%は5年以内に初等教育を修了している。

しかし少数民族の子どもたちは、初等教育を修了する子どもの数、識字率、算数力のいずれの点から見ても後れを取っている。2006年の最新データによれば、それらの子どもの中で予定通りに初等教育を修了するのは60%をわずかに上回る程度で、女子の場合にはその比率がさらに低くなる。

そうした子どもたちの多くは、学校のサービスが十分に行き届いていない山岳地帯に住んでおり、そして貧しい家庭の生まれである可能性が非常に高い。それらの地域では、少数民族の子どもたち向けの教材が不足しており、また教員の数も教室の数も極めて限られている。人々の孤立にさらに輪をかけているのが、すべての学校で使用されている公用語であるにもかかわらず、彼らの多くはベトナム語が話せないという事実である。また女子の場合には、家族の手伝いがあるために学校に行くことができないこと、学校インフラの整備不足、女性にとって教育は価値がないという観念など共通の障害にも直面している。

ベトナムには高いレベルの初等教育修了率を果たすような法的枠組みがあるが、少数民族の生徒のための二カ国語での指導を後押しする規定に一貫性がない。こうした不利な点が複合的に作用すると、今後も長期にわたって少数民族の子どもたちが社会的に周縁化されていく恐れがある。しかしベトナム政府はユニセフと協力して、そうした格差を是正するための対策を講じ始めている。国際的には、二カ国語教育の価値について一貫した認識があり、それは学習の向上ならびに退学率の低下と関連付けられている。

こうした概念がどうすればベトナムで最大の効果を発揮するかを検証するために、教育訓練省はユニセフと協力して、このアプローチを拡大する前に3つの州においてその試験運用を実施し、2015年に向けて、その結果を詳しく調査することにした。該当地域の7つの幼稚園で学習を始め、8つの初等学校で学習を続

けている子どもたちは、現在、モン族、ジャライ族、およびクメール族の民族語で学んでいる。このプロジェクトには、二カ国語教育の技術を身に付けさせるための教員の訓練、地域コミュニティとの協議に基づいて開発された教材の提供、および教育の質の向上を示す確証を得るためのプログラムの注意深いモニタリングが必要とされる。何が最も効果的に機能するかということに関する情報は、国の教育戦略に反映されることになる。目標は、最終的には全国の教育制度を、明確な法的裏付けをもって、すべての子どもたちにとって包括的なものにするることである。



© UNICEF Viet Nam/2007/Chau

2010年の、プログラム2年目の終了までには、初期成果が見込まれることとなった。ある州の教育訓練局は、すでに独自の資金を使って二カ国語教育のクラスの数をも2倍以上に増やすことを決定しているのである。全体としては、子どもたちは各自の母語とベトナム語のいずれにおいても、言語能力テストで以前よりも優れた成績を上げている。それらの子どもたちは、聴解力と算数において、プログラムに参加していない生徒たちよりも高い能力を示している。そうした子どもたちにとって‘周縁化’は、校舎の扉のところで終わろうとしている。